

## 〈社会講談〉という戦法

—— 世界戦争と民衆芸術 ——

中山 弘 明

いつか都下二三の新聞紙に、文壇の人々が筆を揃へて、新しい講談を書く計画があるといふ記事が出たとき、私は大へん面白い計画だと思つた。そしてその実現される日を待ち望んでゐた。すると、七月の雑誌「改造」及「日本一」は改造講談号として、夙くも如上文壇の人数士の手になつた新しい講談を掲げ出した。そして「改造」記者は、この新講談掲載を以て「講談をして意味あるものたらしめ、之を芸術化し、思想化し、民衆教化の一助ともなるといふ氣運」を促すためであると云つてゐる。(中略)こゝに改めていふまでもなく、講談はある意味で民衆芸術の一形式である。従つてそれは、又、同時に民衆そのものの、思想感情好尚の如何を反映したものであるべきであると共に、一面に於てその教化機能たり得るものであるべきである。

(本間久雄「民衆芸術としての新講談」『早稲田文学』大9・8)

〈社会講談〉という試みがあつた。多くの文士・思想家がこの形式で作品を書く。事実、本間がここで指摘している大正九年七月の「改造」には堺利彦、上司小剣、沖野岩三郎、白柳秀湖らによる創作講談が掲載されている。講談が芸能としての鮮度を失ひ、旧時代のものでとされている今日においては俄に信じがたいが、映画や浪曲の躍進があつたとはいえ、大正期、庶民芸能としての講談の人氣は未だ絶大であつた。明治四十二年創刊の「講談俱樂部」は、「書き講談」という新たなジャンルを創出し、ここから吉川英治、国枝史郎らが巢立つていくのも周知の所である。大正中期には、「講談俱樂部」の発行部数は実に四万部にも達していた。桃川如燕、神田伯山らの名人を擁し、伊藤痴遊の政治講談が喝采をもつて迎えられたのもこの時期だ。伊達騒動に取材した志賀直哉の「赤西蠣太」は大正六年の作だが、これが「文芸俱樂部」掲載の悟道軒円玉『読切講談 蒲倉仁兵衛』等を典拠としたように、文学と講談は思ひのほか接近したものであつたはずだ。ここで注意すべきは、本間が「民衆芸術としての新講談」を提唱

している点である。義理人情や任侠を主題とし、朗誦的快感と物語的な興味に裏付けられた講談という語り芸が、庶民に身近な芸能であった事実を考えれば当然とも言えるが、今一つ重要なのは本間がこれを「民衆教化」の「機関」と認識していた事だ。本間の著名な「民衆芸術の意義及び価値」（『早稲田文学』大5・8）が、エレン・ケイの『更新的教育論』を媒介とした「教化主義的」色彩の濃いものであった事実を指摘したのは皆田秀彦だが、著名なヒーローや俠客をめぐる物語を国民レベルで共有することは、過去の伝統的な生活感情にノスタルジックに回帰することで、平均的歴史意識を生成する必要な手段ともなる。さらに、こうした「民衆教化」の具としての講談が注目されていた大正中期が、世界戦争後の恐慌による労働争議の多発や米騒動といった危機的状況にみまわれていた点も見逃せない。激化する民衆運動に対する風紀肅正策として、講談の倫理性が求められていたわけだ。

しかしそこに生まれた〈社会講談〉という試みは、こうした本間の思惑をむしろ裏切る形で、伝統的な旧話を大胆に読み替え、正史に俗説を対置させ、また一連の〈騒動〉を読み手に想起させることで、資本主義社会の構造的断裂をこそあらわに描き出すものではなかったか。事実、「改造」（大9・6）の「社会講談新欄設置予告」には「講談本の『改造』が「新思想を鼓吹」し、強い「反抗的精神」を養うとの記述も見える。〈社会講談〉推進者の一人白柳秀湖は、それを「事実の叛逆」と呼ぶわけだが、本稿はこうした白柳の多くの〈社会講談〉論を糸口として、当時堺利彦、荒畑寒村、藤井真澄らによって試みられた〈社会講談〉とい

う方法を具体的に検討していきたい。むしろこれは、大衆文学前史としても意味を持つばかりでなく、森山重雄が「日本の思想風土に土着するだけの力をもたなかった」と言う民衆芸術論の本質にも関わる問題を秘めている。とかくそれは詩と演劇を核として議論されがちだが、こうした「講談改造」の動きの中に極めて日本的な民衆芸術運動の様態を探ることも可能ではあるまいか。ともかく次章では手始めに民衆芸術論が講談と接点を持つ背景として、折からの世界戦争の中で民族自決の思潮として展開された伝統主義論争を祖上にのせよう。そこから〈民衆〉が〈伝統〉と癒着し、〈民族〉の歴史が要請される時代の動きが見えて来るはずである。

## 二、

私は、過去数年における最も意味ある、又最も価値ある一運動であつた自然主義の当然の推移の一つを伝統主義に置く。この意は無論細説を要するが、こゝではたゞ簡単に論旨の輪郭だけを述べる。すでに、現実に限ぎめ、虚偽と似而非思想との仮面を脱ぎすて、自己の本来の姿を凝視するものは、自らの勢ひとしてその凝視の対当たる自己といふもの、所属種族そのものにその凝視の対当を転ずる。

（本間久雄「自然主義から伝統主義へ」『早稲田文学』大6・5）

民衆芸術の提唱から一年後、本間はこの論で「自然主義から伝統主義へ」という史の見取り図を展開する。一見二つの論は無関係の如く見えるが、そうではない。これは自然主義こそが、「現

実に眼ざめよ」という声に応じた「ヒューマニズムの運動」であり、それに続く「建設的要求」は「民族」を踏まえた伝統主義に帰着するという認識が背後にある。こうした議論は、白樺派をめぐる「自然主義前派論争」などとも相関しつつ、ポスト自然主義をめぐる文壇内の熾烈なヘゲモニー闘争の一環をなす。ここで本間が唐突に持ち出す「伝統主義」とは、この世界戦争の時代、フランスで燃え上がっていたM・バレスやP・ブールジェの批評活動、そしてC・モーラスら「アクション・フランセーズ」の運動を踏まえたものである。例えば広瀬哲士は「仏蘭西の伝統主義」〔雄弁〕大7・4の中で、「過去の父祖から未来の子孫へと流れ行く中断を欲しない生命」の問題に言及し、内藤濯は「民族の正しき伝統に生ける文学」<sup>(5)</sup>の必要性を提言している。太宰施門が本邦初の「仏蘭西文学史」(大6・2 玄黄社)を上肢してこうした思潮を整理すると、「伝統」というタームは文壇の流行語ともなっていく。ここではむしろ「民族」「伝統」の称揚が、当時の世界戦争と密接な関わりを持つことに留意しておきたい。次の金子筑水の発言を見てみよう。

民族乃至民族性といふ事は、現在の世界戦争以来いよ／＼世間の注意を悉く重要な事項と成り来つた観が有る。今日まで歴史に現はれた世界各種の戦争は、其の裏面に多少民族乃至民族性の意義を宿したとはいへ、今日の世界戦争ほど明白に赤裸々に此のことを示したものは曾つて無かつたと断言されやう。(中略)即ち現在の世界戦争は、深く民族的意識に基づいてゐるばかりでなく、又さまざま複雑な民族的疑問が取り

も直さず眼前焦眉の世界的問題と成つてゐる。此の際我々が民族性の意義を考へることは決して無益な業でない。

〔民族性の意義〕「雄弁」大7・4

金子が「現在の世界戦争は、深く民族的意識に基づいてゐる」と述べる根拠は、当時の世界的な民族自決の思潮によるものとみてよいだろう。ウィルソン米大統領の著名な「十四カ条声明」が発せられるのも大正七年のことである。「東京朝日新聞」(大7・1・12)はそれを「民族を基礎とする世界の改造」と報ずるが、太宰施門もまた「欧州戦後の文学と思潮」(時事新報)大5・4・25の中で、戦争が「享楽」を地上から一掃し、「嚴肅な生と社会」を土台にした「新しい愛国的国民的の運動」が勃興することを予測していた。こうした問題は、大戦を契機とした、帝政の崩壊と植民地の独立運動の形で一層過熱した展開を見せていくわけだ。本間の民衆芸術論が、伝統主義という形に屈曲していく背景に当時の世界戦争の影があることは、こうした展開からも明らかであろう。

それならばここで言われる「民族」「伝統」とは何なのか。当時、こうした問題の対極にいたはずの阿部次郎の発言を通して、その内実を探ってみよう。

余とは本来何物であるか、余は如何なる特質を持つてゐるか、余は如何なる方向に余の才能を發展せしむるを得策とすべきか。此の如き自然的素質の問題に答へるためには、余の中を流る、民族の血、余を生みたる民族の歴史を——無意識の間に余の自然的基礎をなせる諸々の条件を、改めて意識的に把

握し、改めて内面的に体験して見ることも亦重要な手段となるであらう。

（思想上の民族主義「思潮」大6・6）

ここで阿部は「民族性は我等の自然的規定である」とし、それは究極的には「血液と歴史」の問題であるとする。一方で「世界人」を自認している阿部は、民族を「自然的規定」とするこの一点によって、あつさりと「自分はこの限りに於いて民族主義の賛成者である」とも述べる。即ち政治性を脱色した概念として「民族」を規定した時、それは「世界主義人道主義の主張と握手するもの」となるわけだ。こうした物言いは、「自己」を一種の「世界人」たらしめるための必須運動」として伝統主義を捉えていた本間の主張とも重なるだろう。しかし今日「民族」が、単なる「自然的規定」たりえないことは言うまでもない。ある共同体の心理的団結を保証する上で、文化、言語等の均質性が仮構され、伝統的儀礼が重視されたわけだが、肝心なのはこの様な「民族」を創出、強化するのは紛れも無く近代的な発想であり、それ自体極めてイデオロギー的概念であることだ。

こうした問題に、当時最も自覚的な反応を示したのは恐らく安成貞雄だろう。「フランス民族精神及び伝統に就て」（『読売新聞』大6・4・21）なる一文の中で、安成は次のように述べる——「フランス民族とは誰れで御座いましょう。フランスと云ふ国家の境域内に住む法律上のフランス国民で御座いましょうか。建国以来、フランスの国境は、幾度か伸縮して居ります。安成は以降、「国境や国籍の異同」「言語の異同」「肉体的特徴」「思想精神」などにわたって詳細な検討を加えた上で、「民族、国語及び

国民の間には、決して一致の必然性が存しません」、「正しき伝統とは、本来の精神とは、一体何ものであるか」と問い詰めていく。そしてその「最も興味ある実物教訓は、アイルランド」に見て取ることが出来るだろうとも言う。安成は西欧の流動する植民地の歴史を踏まえて、「民族」の持つ政治性を正しく喝破していたわけだ。

いずれにせよ伝統主義をめぐる当時の議論は、フランス思潮の紹介という体裁をとりながら、その実、近代国家を支える「民族」と「伝統」という概念を移入、消化する役割を果たした。加能作次郎が「伝統主義の提唱は文壇にかなり大きな反響を与へた。その実際の直接の影響としては、我国の古文学及び古民族の新研究の空気を醸成したことである」（『伝統主義その他』「文章世界」大6・12）と述べるように、それは津田左右吉や和辻哲郎を古典研究へと導いた、〈国文学〉の創出とも深い関わりを持つている。しかしここではむしろ、同じ加能が伝統主義を「民衆芸術」と結び付けて論じていた点に留意しておきたい。他にも例えば吉田絃二郎は「私は伝統主義と民衆芸術とを結び付ける時そこに一つの暗示を見出す。嘗て『自然に還れ』と言った私たちは『民衆に還れ』と叫んでゐる」とも述べていた。かつての自然主義の牙城「早稲田文学」で論陣を張る本間が、民衆芸術論を折からの世界戦争を意識しつつ伝統主義へと屈曲させた道行きは既に見たが、加能や吉田の発言もこうした状況に呼応するものだろう。当然、問題は〈文学〉に極限されるものではなかったはずだ。本間が庶民的な伝統芸として、「講談」の革新に言及したのも故なきこと

ではない。伝統主義の批判者野上豊一郎も、当時「武士道と国民道徳の通俗講話」（「伝統主義を排す」『新潮』大6・11）が巷に広く流行していた事実を指摘しているし、生田長江も「教化の一手段」として「演芸物」の効用に言及する。<sup>9)</sup>あるいは、大杉栄訳のロマン・ロラン『民衆芸術論』（大6・6 阿蘭陀書房）には、「朗誦」（Uccine）の訳語として「平民講話」という言葉が使われており、ここからも講話というジャンルが当時にかに重視されていたかが推し量れる。折しも世界戦争は日本経済を未曾有の混乱と危機の中に追い込んでいた。成金と米騒動の時代である。伝統主義はこうした巷の不安を沈静化させる政治的目論みを、当初からその内部に隠していたと言うことも出来よう。例えば騒動後の大正八年、「教化」の具として芸能・文芸を改革する組織として国民文芸会が、床次竹二郎内相の肝入りで発足する。まさに〈社会講話〉はこうした時代の中に産み落とされたわけだ。尾崎秀樹は、この〈社会講話〉こそ「民衆芸術論の推移」に対する、「つよい抵抗」の精神の産物としている。次章では、特に白柳秀湖の〈社会講話〉論を採り上げて、こうした「抵抗」をつぶさに検討していくことにしよう。

### 三、

大正八年初夏、「改造」社主山本実彦は、築地の精養軒に文士学者らを招いて晚餐会を催した。桑木厳翼、片上伸、堺利彦、高島素之、室伏高信ら錚々たる面々と共に出席した白柳が「漫談的」に話した「新講話」の構想に、山本をはじめ多くの出席者が

賛同し、事は一氣に現実味を帯びたものになったという。白柳は後年、自負を込めて「『社会講話』運動は、従来誰も突崩すことの出来なかつた文壇の堅塁に兎にも角にも何ほどかの損害を与へた」と述べている。彼によればこの「改造運動は誰でもよく記憶して居てくれる」ほどの大きな反響となり、「今、大衆文芸の花形と呼ばれて居るお歴々がその頃から続々世に現れて来た」とも言う。当時の「改造」にはもちろん志賀の「暗夜行路」が連載されていたわけだが、今日その誌面を瞥見すれば、〈社会講話〉欄が圧倒的な分量で「暗夜行路」を凌いでいた事実に気付くだろう。ここでは白柳の一連の〈社会講話〉論と、その具体化の第一作『藤吉郎長短槍仕合』（『淑女画報』大9・516）を組上にのせてみよう。

「声なきに聴く」（大15・12 人文会出版）と題した白柳の評論集には、「安成君と石橋君」という興味深い一文が見られる。ここではまず安成貞雄の「講話の流行するのは勧善懲惡の解決が明かで、低級読者の満足を買ふに適して居るから」という説と、石橋湛山の「講話の取扱ふ世界が、此窮屈で不自由で貧乏で行詰つた世の中と余りに掛け離れて居るから」という説が紹介され、これらは「講話の全部には当てはまらぬ」と退けられる。それなら白柳の見解はどうかといえ——「講話流行の第一義は、人間の『事実』に対する不可思議な欣求」であるということになる。「講話を歓迎する民衆の心には、深い／＼時代の反映がある」ことを冷静に見つめる彼は、一方世界戦争を背景とした「科学講話の流行」にも言及し、二つを等価なものと捉える。こうした〈事

実)志向の中に、白柳流の「唯物史観」を見てとることもあるいは可能かもしれない。文字通り「事実の叛逆」(大14・1 玄文社)と題された彼の社会講談集の序文には、こんな一節も現れる。

私は近代文芸がクラシック文芸の英雄や鬼神を駆逐し、ローマンチック文芸の夢のやうな恋物語を駆逐したやうに、近代文芸の「心理の誇張」をも駆逐してやりたくなつた。さうして全然主人公なしの読もの、即ち或る事件を中心としたり、或る階級の人々を中心としたりする人生の一面が書いて見なくなつた。さうして思切つて「俗衆」の中に突進して見たくなつた。それには講談といふ名、講釈師といふ立場が一番よいと思つた。

「近代文芸の『心理の誇張』を撃つために「講釈師といふ立場」を意識的に選択する白柳は、なかなか戦略的である。いずれにしてもここでいう「講談」は、もはや道德鼓吹の通俗芸能でないことは明らかだろう。彼が言う「或る事件を中心としたり、或る階級の人々を中心としたりする」社会講談の実作については次章で見ることになるが、一方ここで白柳が、今日「実録」「正史」とされているものの中にも「権力で事実を詐飾」されたものが多い点に言及しているのは重要だ。敢えて「俗説」を尊重してみせる彼にとって、「事実をインタープレートして読まする」社会講談の方法は、逆に真の「歴史を知らしめる」極めて有効な手段として認識されていたわけだ。社会講談が「事実の叛逆」と命名される所以である。

さらにこうした問題は、〈文芸〉をめぐる根本的議論とも関わ

る。「美の感念<sup>コンセンサス</sup>は決して吾々の実生活と没交渉のものでなく吾々の生存欲、物質欲の発展してゆく過程に現はれた一種の現象に過ぎぬ」(「社会講談選集」序文 大14・5)といった認識は、評論「生存欲の変態としての文芸」(「改造」大8・7)など以来の、白柳の基本的問題意識といつてよいだろう。人間を欲望の主体とし、その現れを〈文芸〉に見るといふこうした意識が、社会講談をも支えていたわけだ。

さて次に見るのは、社会講談の具体的方法論である。

講談の改造に左の三つの方法がある。

一、旧来の講談の条理をそのまゝに追ひ、それを新しき筆致と、新しき思想にて、新しく紹介若しくは解釈して行くこと。  
二、旧来の講談の条理を破壊し、唯その題材のみを取りて、全然新しき講談を作ること。

三、条理も題材も全く新しきものを撰ぶこと。

右の一と二とは、既に近頃の講談雑誌が盛んにやつて居る。さうして其中には筆致若しくは表現法に於いて却々すぐれたのがある。唯、人生若しくは社会の「解釈」といふ一点に於いて之はと思ふやうなのがない。吾々の恃む所は、この「解釈」である。

〔講談改造の三つの方法〕(華十郎と富蔵 大10・5 金剛社)

白柳はさらに「書き講談」の文体を二つに分類する——「物語体 事の虚実に関する考証、其他一切の評論を避け、純然たる一篇の読もの、物語として終始するもの」、「評論体 大体に於いては物語としての条理を追ふも、所々に評論を加へ、考証を施し、

読者をして俗説と共に正史、正伝をも併せて学び得さしむるもの。これは語り手の作中への介入の度合いの問題として、歴史と物語の相関性や解釈と歴史叙述を考える上でも極めて重要な分類といえる。さらに白柳は、講談再生にあたり、当時流行のメディアの技法も大胆に導入する。「私はかねて活動写真で、同時間に起る二つの偶然の出来事を、交互に二くさりづ、映写して行つて結局それが一つの条理に合するのをひどく面白いと思ひ、本篇の前半に二ヶ所ばかりその表現法を試みた」——プロット展開に映像処理の技法が意識されている。該当作「藤十郎と富蔵」は、旗本の用人であつた藤岡藤十郎が博打と女で身を持ち崩し、江戸市中を徘徊するうち幼なじみの大塚富蔵なる無頼漢と再会、二人で謀つて江戸城から四千両を強奪するという奇想天外な創作講談だが、藤十郎と富蔵の来歴を交互に語り進める方法や、藤十郎が主家の娘お袖に恋慕し、その仲を取り持つため兄弟分の山田源吾が奔走する件りなどに、そうした映画技法の転用が顕著だろう。社会講談はその意味でも、なかなか野心的な方法論を秘めていたわけだ。

さて次に社会講談第一作「藤吉郎長短槍仕合」の検討にうつろう。これはよく知られた「真書太閤記」の一挿話——木下藤吉郎と槍術の名手上島主水が実戦における槍の長短の得失をめぐる対立し、それぞれ雑兵を率いて信長の御前試合に臨むという話である。先の分類に則せば二の「評論体」ということにならうが、「俗説の中に光る真実を求めて」の副題を持つこの作を、白柳は「社会講談に対する私の態度を明かにした一種の宣言書」とも規

定している。即ち「淑女画報」という掲載誌を充分考慮して、「学校出のお嬢さま方」に、「平民階級の見た世の中」を知らしめるという意図のもと、誰もが馴染みの「太閤記」の挿話を大胆に読み替えたものである。例えば冒頭にはこんな一節が現れる。

近くは世界の大戦役でもさうではありませんか。戦争の起つた当座は新聞も、雑誌も、先を争つてセルビヤ対奥匈国の關係を紹介しバルカン問題で欧州の外交通を振廻したのですが、(中略) 今日ではセルビヤ問題などは隅の方に片付けられてしまつて、誰でも之を世界に於ける英、独の争覇戦として説明するやうになつて居ります。物事は何うしても永い眼で見るといふことが必要であります。処が物事を永い眼で見ると、一番都合のよろしいものは何ものかと申しますれば、それは時の権力に關係の遠い下層階級の眼で御座います。講談、俗書の説く所には物事を「永い眼で見た」貴重な観察が却々に多いのであります。

重要なのは、戦国時代における藤吉郎と上島主水の「槍仕合」を語るに、現代の世界戦争から説き起こしていくという問題である。雑兵を組織だて徹底した「訓練」によって見事勝利する木下藤吉郎と、己の槍術の腕前に溺れる上島は「新旧思想の衝突」として押さえられる。さらに「戦争が大規模になり」、それにともなつて「新しい武器」も必要となつた戦国の世では、人間の動かし方自体が「団体的」となるわけで、その意味でこの挿話は極めて現代的読み替えが可能なのだと言う。そして鉄砲の活用に見られるように、「秀吉の嗅いだ煙硝の臭ひは、フオツシユ將軍や、

ヒンデンブルグの嗅いだ火薬の臭ひと同じ」ものともされている。つまり、「戦争の方法が土台から変つてしまつた」時代を生きた「秀吉は実に近代人」なのだというわけだ。ちなみに「淑女画報」をはじめとする当時の女性誌を繰ってみると、意外なまでに戦争特集や科学読み物が多いことに驚かされるが、こうした社会性と科学精神に裏付けられた新しい女性像が期待されていた中にあって、白柳の社会講談はそんな読者の志向を視野に入れたものでもあった。「狂言戯語の名にかくれてした世俗の觀察」をこそ重要と考える彼にとつて、こうした「世間の新しい御婦人方や、新しい文士諸君がなさるやうに講談といふものを捨ててしまひません」という断言は、したがって充分啓蒙的でさえあったわけだ。「講談の修正に理あり」の言葉で作品は閉じられるが、尾崎秀樹が白柳に見出す「売文社の精神を継ぐ」「叛逆」の企ては、実はこうした「社会講談」という形をとつて、米騒動後の風紀肅正時代の強力な「毒」となり得たものではあるまいか。

#### 四、

早く申せば、紀文一代の暴富は、此の千両といふ資本が生み出したやうなもので、現代の紳士閥経済学者の言を藉りて申しますならば、「富を生むものは資本」なのであります。然し、そんなら此の千両といふ資本は誰が作り、何が生み出したのか、藤浪河内が文左衛門に貸し与へた千両の金は、玉

津島明神の講中の積立金の一部であります。それは天から降つた物でもなければ地から湧いた物でもなく、畢竟講中が粒々辛苦の末に積立てたもので、現代の言で申せば所謂「労働の結果」であります。

（荒畑寒村「紀伊国屋文左衛門」「改造」大10・7）

人口に膾炙した「紀文大尽」の出世譚に、荒畑寒村はさりげなく右のような一節を挟み込む。「蜜柑や船舶、新しい言葉で申せば資本です」といった言葉も見える。「講談全集」（昭4・3 講談社）収録の宝井琴窓口演「紀伊国屋文左衛門」では、有名な紀州蜜柑を暴風おして江戸に運び巨利をなす逸話がいかにも劇的に語られているが、それを取り込む点では寒村とても変わりはない。「沖の暗いのに白帆が見える」の俗謡も登場する。しかし寒村はこう付け加えることも忘れていない——「紀文にしろ、カアネギーにしろ、或は其他の如何なる資本家にしろ、その暴富を積み、成金となり、ミリオネア若くはビリオネアとなる事を得たのは、悉く他人の労力を賃銀で買ひ他人に働かせて其の剰余価値を掠奪するのであります」。紀文の出世譚は、こうして現代の「成金」経済の問題にすりかわる。ここでは「紳士閥経済学者」の説が退けられ、その巨利の獲得が「他人の労力」と「剰余価値」によるものであることが明らかにされている。当然荒くれた船乗り達とのやりとりも、旧話の如く紀文の「男意気」を示す挿話から「労働契約」問題に置き換わるわけだ。寒村はこの作品以外にも「鼠小僧と蜆壳」（改造 大9・9）などの社会講談を残しているが、ここでも「天明の大飢饉」を背景に、「富豪」を標的



とする怪盗と、貧困に喘ぐ少年のつかの間の出会いが語られている。

次に採り上げるのは堺利彦の『社会講談 大塩騒動』（改造）大10・4である。まず語り出しはこうである——「天保の八年に大塩騒動が起つた。丁度今から八十四年前だ。八十四年前と云ふと、随分古い昔のようにも聞えるが、其の中から大正の十年と明治の四十四年と、合せて五十四年を引き去ると、あとは只つた三十年だ。徳川幕府の仆れた時から只つた三十年前のことだ」。

ここで騒動は「市街戦」とも呼ばれているが、米騒動の別名が「大正米一揆」であつた事実を考えると、堺が「大塩騒動」をあくまで現代に引き付けようとした意図が見えて来る。

サアそれから罹災者の収容所が出来る、お救ひ米が出る、廉売米が出る、出しおくれの富豪の義捐がある、米価が更なる、疫病が流行する、随分の混雑であつた。然し其中、暴徒の多くもそれぐ逮捕となり、或は自殺し、久しく行方が知れずに不安の種となつてゐた大塩父子も、三月廿七日、油掛町手拭地仕入職美玉屋吉五郎方に潜伏してゐるのを発見され、そこで自ら焚死して落着した。

鵜外が大塩平八郎の思想を「醒覚せざる社会主義」と呼んだのは有名だが、堺は大塩を「がんこな人間」「天保人間」と命名している。ここでは大塩の反乱にあわてた鴻池ら「富豪の義捐」や、幕府による「廉売米」の提出にも言及することで、読み手に否応無く三年前の米騒動の混乱を想起させることが目論まれている。こうした戦略は、例えば同じ堺の社会講談『一休和尚』（改造）

大10・1でも踏襲される。とんち話で有名な風狂の禪僧の物語から堺が採り上げるのは、友人の米問屋錢屋久兵衛との問答である。一休はまずこう語る——「百姓は米を作る。鍛冶屋は鋏や鎌を作る。船頭や馬方は荷物を運ぶ。皆それぞれの役目をしてゐる。こなたも仲継の役目をしてゐる。世の中に御奉公する役目は皆な同じわけぢや。所が久兵衛、百姓も鍛冶屋も船頭も馬方も、一生働らいて只だ口過ぎをしてゐるばかりぢやが、仲継役の米屋だけが独りメキメキと大身代を作りあげたのは、之は久兵衛、一体どうしたものぢやらうのう」。一休が年始祝いに久兵衛宅を訪れ、縁起の悪い話を次々持ち出して久兵衛をへこますという著名な逸話を活用したもののだが、いつの間にか一休は「経済といふ学問」を語り出す。つまり「錢屋の金銀財宝家倉といふものは、皆な悉く他人の汗あぶらの塊り」なのだといふわけだ。「大塩騒動」でも、最後はこの謀反を振り返る巷の易者と若者の對話で結ばれる。そこで若者は世間が「金持様の御支配」であることを改めて嘆きつつ、「これからまだ癩癩玉を投げる人が仰山に出て来るのやらか」とつぶやいている。堺には他にも社会講談『バリ・コンミュンの話』（改造）大10・7なる作品もあることを考えると、こうした試みを一概に経済決定論と笑えないはずである。つまり大塩の暴動に「コンミュン」の幻影が重ねられていた可能性も大いにあるはずなのだ。いずれにせよここにはもはや過去の空疎な英雄神話はない。周知の俗説や旧話を再構成することで、そこに階級意識を忍び込ませ、説話の現代的意味が取り出される。国民を歴史的に統合する手段として期待されていた講談は、異なる視点の

下に解体再生されることになるわけだ。例えば他には宮嶋資夫「社会講談 国定忠次」(『改造』大10・3)の中にも、米問屋の買占めに對して、「大正の今日でございまして、日本に米がなくなつても、外国から輸入すると云ふ便利もございます」といった一節がさりげなく挿入される。忠次に、現代の義民としての意味が付与されていくのである。

さて最後に検討するのは藤井真澄「際物講談 ゲンコツ団長の失望」(『改造』大10・7)である。まずその口上から見てみよう。

そも／＼ですな、講談落語なるものは元来文章や読物ではないので、口舌は音声の働きを以て耳にうつたへるものぢやありませんか。で若しそれを読物にしたいとなれば、謂はゆる口演筆記となるのが本当でせう。然るに近頃の大流行、新講談と称するもの如何と見れば、みんな申合せでもしたのでせうか、通俗はまがい小説、ローマンスは文章体の物語に墮してゐるぢやありませんか。

「活きた講談」を志向する藤井は、徹底して「口演筆記」の体裁を模倣し、くだけた会話調で語り進める。またその素材も「今日只今の際物問題」として、メーデーが扱われている。当然そこでは「労働運動ブローカー」の暗躍なども語られるわけだ。

大正九年——未曾有の戦後不況が日本を直撃する。企業倒産が相次ぎ、成金の夢も消えて町には失業者が溢れていた。激発する争議とその調停を目標に組織された友愛会の思惑、アナ・ボルの対立など日本の労働運動は混沌の唯中にあつた。メーデーはこうした混沌と官憲の厳しい弾圧の中で幕を開ける。第二回のそれは

翌大正十年五月一日、芝浦で開催された。五月二日の「東京朝日新聞」には、「労働祭は炎の渦 芝浦上野に会衆一万」の見出しが見える。それによれば友愛会主導の進行は、個人演説に移るや野次と怒号で統制は忽ち奪われ、上野公園への示威行動では警官との衝突が各所で見られたと新聞は報じている。秋田雨雀の「メーデー印象記」(『社会主義』大10・6)によれば、「小川未明君、藤井真澄君の姿も見へ」とあり、作者はまさにこの混沌の渦中にいたことが分かる。したがって作中の「翌日の新聞を見ますといふと、この間のこまかい消息を、ちつとも観察できなかったと見えまして、単なるがや／＼騒ぎとしか、どの新聞もこの新聞も、報道してゐませんでしたね」、「わずかな押合ひにでも深重な意味が含まれてゐるのを、世の新聞記者諸君よ、決して忘れてはいけませんぞ」とは現場にいた作者の自負の言でもあらう。

この作は「ゲンコツ団」——急進的サンジカリスト集団の団長を軸に、当日参加した団体を「第一は、此のメーデー(マデー)を秩序よく無事に終らせようといふもの、第二はひたすらに労働者の威力を天下に示さうとするもの、第三は機会さへあれば少しでも猛烈な運動に移さうとするもの」と分類し、こうした集団の狂闘ぶりを滑稽かつ勇壮に語っていく。見方によればそれは、講談の真骨頂である軍談の修羅場読みのパロディであり、また弁士が語る活劇映画の一場面とみることも出来るかもしれない。それは例えばこんな具合である。

サア大変！ 右手の真黒い青服の大きな流れは、堤を破つた洪水のやうに、正面の野次馬の間を無理弥理つききつて、左

手の赤い小さいひとかたまりへと、なだれか、つたものです。もみあひへしあひ殴り合ひ、旗の奪ひ合ひの瞬間の光景は、とても喋りつくせるものぢやありません。白い腕巻の世話人が飛んで行く、警部らしい者さへその渦巻の中へはいって引分けようとしてゐるのが、パツ／＼と活動フィルムのように見える。赤い組は印刷工で体格なんかみんな弱さうで、主たる者は僅か二三十人もあつたでせうか、これにひきかへ青い団体は器械工で頑丈で強健な七八十人、それに野次や他の組の連中も加はつて優に百人以上！ とても喧嘩になるわけのものぢやありません。

ここではもはや思想や立場の相違は棚上げされ、打ち振られる旗の色が「活動フィルム」の如く明滅し、人の流れが「堤を破つた洪水」として語られていく。野次馬の罵声や警官の怒号も加わり、読み手はメーデーの日の喧噪の渦中に引き込まれていくわけだ。これに対して「ナンちふだらしない労働運動だ」と傍観する新聞記者には、すかさず「オ、正しく美しき善良なる労働運動」とはいったい何だろうかという言葉が浴びせられる。さらに語り手は「こんなのが全く『改造』の愛読者でせうね」と新中間層知識人の読者を冷やかし、挑発もする。またデモ隊の先頭が「東照宮」にかかったところで「お廻りさんの警戒線にぶつかる」場面は、皮肉たっぷりにこう解釈される——「諦めと、センチメンタルな他力本願の伝統を、呆れる程上手にうえつけた、えらいおやぢ、超人、権現様のお祠の石段の前で、此の反抗と創造に目覚めかけたメーデーの行列が、びつたり止められたといふこ

とは頗る妙ですな」。旧来の講談が、まさにこうした「他力本願の伝統を、呆れる程上手にうえつけ」る手段として期待されていたことを想起するなら、《社会講談》がそれを巧妙に逆用するジャンルであつた事実が見えて来るだろう。

先の秋田雨雀は「統一した思想がない」この日の集会を、「内部的には空虚」なものとしているが、空転と混沌の中にあつた当時の運動の亀裂を有りのままにさらけ出してみせるこうした《社会講談》の戦法は、安易な協調や和解の中に鋭い裂け目を持ち込んでいたと見ることは出来ないか。人と人とが劇的に対立するさまをあらわにし、都市の群衆が沸き返る瞬間をその渦中から捉えてみせること、周知の旧話をあくまでさりげなく転用再生してみせること——いずれにせよイデオロギーさえ平然と乗り越える、こうした「事実の叛逆」は、危機の時代にあつて《社会講談》という形でしたたかに顕現していたのである。

注(1) 『講談社の八十年』(平2・7 講談社)

(2) 曾田秀彦『民衆劇場』(平7・12 象山社)

(3) 本稿は、第一次大戦期の言説を検討した以下の拙論を受けるものである。「生田長江の《戦争》論」『国文学研究』平8・10、「中澤臨川論」『文芸と批評』平8・11、「戦争と証言」『日本文学』平9・9、「戦争と新聞」『文芸と批評』平11・5、「『第三帝国』の岩野泡鳴」『文芸と批評』平11・11、「『赤光』の時代」『日本近代文学』平12・10、「落首と米騒動」『日本文学』平13・2

(4) 『民衆芸術論』(日本文学) 昭38・7

(5) 内藤濯『伝統に生ける文学』(読売新聞) 大6・3・14(15)

- (6) 本間久雄「再び伝統主義について」(『早稲田文学』大6・11)  
 (7) 加能作次郎「身辺雑記」(『読売新聞』大6・6・9)  
 (8) 吉田絃二郎「伝統主義が与ふる暗示」(『時事新報』大6・6・5  
 18)  
 (9) 生田長江「通俗芸術の問題」(『新小説』大6・2)  
 (10) 尾崎秀樹「大衆文学論」(昭40・6 勁草書房)  
 (11) 「序文にかへて」(『大衆文学全集』昭4・3 平凡社)  
 (12) 例えば同じ「淑女画報」(大9・5)には、本間久雄の「新しい時代の為の新しき婦人」なる論が掲載されている他、「日本最初の

- 女流飛行家」といった記事も見える。  
 (13) 民族主義者に変貌していくその後の白柳の推移を見ると、講談といふ芸能の持つ二面性も理解出来るはずである。  
 (14) 注(10)に同じ。

※引用はそれぞれの雑誌、新聞、単行本により、漢字は新字とした。また文中の標題は引用と紛れるため二重括弧で表記してある。

(二〇〇一・四)

## 新刊紹介

東郷克美著

### 『太宰治という物語』

氏の多岐に渡る日本近代文学研究の神髄とも言える、太宰治論究の集大成。作家・太宰治の出発点を「現実世界における津島修治は永遠に死に、言語による虚構の世界において生きる作家太宰治がここに誕生するのだ」と高らかに宣言し、その視座を一貫して持ち続ける。その上で多角的に、初期習作から「グッド・バイ」までの主要作品を余す事無く論じる。論は時に縦横無尽に、時に慎重に運ばれていき、その中で、論断することが非常に困難な「太宰治」という人物の「物語」が、徐々に紐解かれ、そして織り成されていくのである。

「太宰治」という人物を「物語」とする考え方に氏は、「機能としての作者」という新たな可能性を見出している。「太宰治」に関せずとも、その可能性から目を背けることはできない。その意味でこの著は、あらゆる読者に新たな「物語」を開いていくことを促し続けるであろう。

(二〇〇一・三 筑摩書房 四六判 二九六頁 三八〇〇円) [平 浩二]

荻原雄一編

### 『舞姫』エリス、ユダヤ人論

本書には編著者・荻原雄一氏をはじめとする六氏による、『舞姫』に関する十四編の論文が集められている。

全体は三部構成で、第一部・第二部では

作中人物「エリス」および実在の「エリゼ・ヴァイゲルト」の素性に「舞姫」のテクスト、実証的な調査双方から迫っている。いわゆる「エリス、ユダヤ人論」である。また、それを踏まえて『舞姫』全体の新たな読解の可能性をも示している。

第三部では、さらに発展して当時のベルリンの地誌、ユダヤ人の置かれた文化的・社会的状況等、別の角度から『舞姫』の世界に迫っている。

全体として、論者がそれぞれの視点から『舞姫』を論じているため、作品中の様々な事柄に関して甲論乙駁の観がある。しかしそれはとりも直さず『舞姫』というテクストのいまだに色あせぬ豊かな可能性を示していると言える。

(二〇〇一・五 至文堂 A5判 二五七頁 二三八一円) [工藤智哉]